

平成 15 年度 学位論文

コンパニオン・アニマルの喪失体験に関する
心理臨床学的研究

兵庫教育大学大学院

学校教育専攻

教育臨床心理コース

M02086A

渡 邊 純 子

はじめに

動物と人間の良好な関係の1つとして、パートナーとしてのコンパニオン・アニマルがある。彼らから人間が受ける利益は慰め・話し相手など非常に大きい。失ったときの悲しみもまた大きい。動物は人間よりも寿命が短いので、その死をしばしば体験することになる。その喪失がもたらす悲嘆が大きく治療が必要になった人々には適切な対応が求められる。この研究が、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆の心理状態を分析し、これに対応する方法の研究に少しでも役立つことができれば幸いである。

目 次

はじめに

目次	(1)
第 1 章	問題および目的 (2)
第 2 章	方法 (11)
第 3 章	結果 (15)
第 1 節	飼育動物種の検討	
第 2 節	対コンパニオン・アニマル態度測定尺度	
第 3 節	コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度	
第 4 章	考察 (26)
第 1 節	結果の考察	
第 2 節	まとめ	
引用文献	(35)

おわりに

謝辞

Appendix

第1章 問題および目的

第1節 人と動物の関係

人間が動物と共に暮らしてきた歴史はきわめて長く、それは有史以前まで遡る。両者の共存関係は、人間が物質的な功利性を得るために動物を家畜として飼育することから始まった。このような人間と動物の密接な関わりは、数千年にわたって存在してきている。その中で、生活を共にする動物が人間に対して肯定的な影響を与えることはこれまでも暗黙のうちに知られていた。やがて、動物を可愛がりときには慰みを得る対象としての関係が出現した。動物に対しての見方も、飼い主の単なる所有物、従属物という意味あいの強いペット（愛玩動物）から、人間の仲間として生活を共にするコンパニオン・アニマル（companion animal：伴侶動物）へと変化してきている（Boldt & Dellmann-Jenkins, 1992）。

人間が動物との相互作用から受けている益（benefit）については、「人と動物の関係」を取り扱う分野で、欧米において1970年代によく研究上の注目を集めるようになった（Bustad, 1994）。1970年代初頭に、米国のデルタ協会（Delta Society）が「人と動物の絆（HAB：Human-Animal Bond）」を提唱したのをきっかけに、さまざまな研究がなされるようになったのである。その結果、動物との相互作用が人間に良い影響をもたらすことが科学的に明らかになり、動物が人間に及ぼすこの効果を実際の社会生活の中で積極的に活用しようという動きが活発化した。その代表的なものは、動物介在療法（AAT：Animal-Assisted Therapy）や動物介在活動（AAA：Animal-Assisted Activity）である（加藤, 1999）。しかし、AATやAAAは、精神病患者や老人ホームの入居者などの特定の条件下にある人

を対象に、精神科医などの専門家や訓練を受けたボランティアによって行われるという特殊な性質をもつこともあり、日本人の日常生活に密着しているとは言い難い（杉田, 2001）。

上記のように欧米では 1970 年代から、コンパニオン・アニマルとの相互作用が人間に与える影響をもたらすことの効果を科学的に明らかにした研究を中心に、人間とコンパニオン・アニマルの関係について様々な分野の研究が行なわれ始めた。Levinson (1983) は、コンパニオン・アニマルの飼育とパーソナリティの発達について、①何世紀にもわたる、さまざまな人と民族グループにおける動物の役割、②動物とのつきあいが人のパーソナリティの発達に及ぼす影響、③人と動物のコミュニケーション、④障害者や高齢者のための正式な心理治療、施設整備、そして住居整備における動物の治療的利用の 4 つが、主要な研究領域であると述べている。また、Boldt et al. (1992) は、先行研究の文献をもとに、施設や地域社会で暮らしている高齢者が、コンパニオン・アニマルとつきあうことによって受ける影響、特に身体的、社会的、精神的健康において受ける影響についての研究をおこなった。その中で、専門家が認識している多様な人生という要因（高齢者の健康、経済的地位、家庭環境、現在および以前のコンパニオン・アニマルに対する態度や愛着）の影響について、特に重点をおいて検討している。そして、コンパニオン・アニマルとのつきあいは、高齢者の生活を豊かにすると結論している。その他、動物との触れ合い、またはその存在自体で血圧が安定して、精神状態が落ち着くことや、心臓病患者の 1 年後の生存率を高めるなどの効果を、科学的に明らかにした研究などがある（Katcher, Beck & Lynch, 1983）。

日本では、浅川・佐野・古川・東・森田（2000）によると、両者の関係そのものや動物が人間にもたらすもろもろの効果についての組織立った科学研究や記録は稀少といわざるを得なく、最近ようやく、高齢者を対象とした研究を中心に、研究がなされるようになってきたという。その上で浅川ら（2000）は大学生を対象とし、質

問紙法を用いて、コンパニオン・アニマルの癒しの効果に関して健康心理学的な研究を行った。その結果、対ペット態度測定尺度が作成され、4 因子（動物に対する親和性の因子、動物によってもたらされる精神安定性の因子、動物への嫌悪性を示す因子、動物が人間に飼育されることへの不憫さを表す因子）が抽出されている。そして、この4 因子をコンパニオン・アニマルの飼育の有無、コンパニオン・アニマルによる癒し体験の有無、飼育願望の有無、とともに検討し、
‘本結果は、ペットの癒し効果の認知が、実際にそれを体験した人々ばかりではなく、ペット飼育をしていない人にまで及んでいるといえよう’ と述べている。また、斉藤・岡田・加納（2000）は、コンパニオン・アニマルとともに生活している在宅高齢者を対象に、尿17-KS-S と 17OHCS を測定する生理学的な評価によって、ストレス対応へのコンパニオン・アニマル飼育の効果を明らかにすることを目的として研究を行っている。その結果、‘コンパニオン・アニマルを飼育している高齢者に、ストレスに対する良好な適応能が見られ、その共存生活は高齢者の健康維持に役立つ可能性があると思われた（p.301-302）’ と述べている。横山（1996）は、アニマルセラピーの利点を挙げ、生理的効果、心理的効果、社会的効果などを検討し効果概念図をまとめている。このように日本においても家庭で人間と共に暮らす動物で、人間が物質的な功利性を得る以上の密接なかかわりをもつ動物について述べられた文献が、アニマルセラピーの分野を中心に存在する。

次に、そのような動物について、それぞれの論文でどのように述べられているかを見る。小暮（1986）は‘犬、猫、小鳥などはペットといわず、コンパニオン・アニマル（伴侶動物）と呼ぼうという提案については、すでに獣医の間では良く知られています（p.8）’ と述べ、関谷（1999）は‘最近では、コンパニオン・アニマルという言葉さえ生まれてきて（p.49）’ と述べ、安藤（2001）は‘近年、わが国においても、「ペット動物」を「コンパニオン・アニマル＝一緒に暮らす伴侶もしくは仲間としての動物」と呼ぶようになり…

(p.25)’と述べ、宇田川(2002)が「コンパニオン・アニマル」という言葉を耳にしたことがあるだろうか。人と動物との関係において、これまでのように単に人間が一方的にかわいがるペットとしてではなく、「その動物の特性を理解し、人とともに暮らす仲間としての動物」それがコンパニオンアニマルである(p.75)’と述べて、「コンパニオン・アニマル」という言葉を用いている。一方、その他の最近の研究では、家庭で人間と共に暮らすそのような物質的な功利性を得ること以上の密接なかかわりをもつ動物に対し、朝比奈(2002)、杉田(2001)、浅田(2000)、横山(2002)が「ペット」を、藤崎(2002)が「ペット動物」を、それぞれの論文の中で用いている。そのため、「コンパニオン・アニマル」という言葉は、日本ではまだ安定した定着をしてはいないといえる。しかし、浅川ら(2000)が述べているように、人間と動物との好ましい共生・共存的な関係が、人々の円滑な生活を支える一助となるとの認識がなされつつあるのである。

コンパニオン・アニマルの喪失体験

コンパニオン・アニマルの寿命は人間の寿命に比較して短いため、多くの場合、一緒に暮らしている人間は、コンパニオン・アニマルの死を体験することになる。彼らは、コンパニオン・アニマルから多くの益を得る一方で、その喪失に際しては不利益(悲哀や悲嘆)をも得ることになる。一緒に暮らす動物の喪失を「ペットロス」というが、悲嘆の解決に向けた心理的、身体的、社会的な個人の変容過程を意味する語として用いられることが多い(内田, 2001)。杉田(2001)は、「ペット・ロス」について同様の定義をしており、「ペット・ロス」を取り上げた点として次の3点を挙げている。それは、①コンパニオン・アニマルを飼っている日本人の誰もが経験する可能性があるという点、②マスコミに取り上げられて多くの人に知られてはいるが、正確に理解されているとは言えないという点、③AATやAAAと同じく動物との相互作用によって生じる現象であるとい

う点である。そして、これらを踏まえて、「ペット・ロス」の特性を明らかにし、人と動物の相互作用関係を軸に、ペット・ロスに陥る要因について考察するという目的で、内外の文献を整理している。その中で、‘英語の文献では「pet loss」より「grief responses」が用いられることが多い(p.42)’としている。横山(1996)は Freud(1917)の「悲哀の仕事」と Kübler-Ross(1969)の5段階を用いて、コンパニオン・アニマルの喪失による「悲哀の仕事」を説明している。

この喪失による悲しみは、精神的な変化だけでなく、身体的変化をも引き起こす。鷺巣(1998)は、コンパニオン・アニマル喪失の際に観察される身体的悲嘆反応としての症状(睡眠障害、消化器症状、頭痛、食欲異常など)を挙げている。また、「悲哀の仕事」の過程がスムーズに進まないとき、さまざまな問題が生じる。海外では、Bowlby(1980)が対象喪失の一つの形として捉え、最近では Bryant(1990)が子ども時代はコンパニオン・アニマルとの死別も生き別れも子どもにとっては等しいストレスを受けることになることを指摘している。また、Deeken(1986)は、悲嘆の研究において、その経験が愛する人との別れを体験した際の悲嘆の持続時間に影響を及ぼすことを示唆している。内田(2001)は、この悲嘆の変容過程が重度であり専門家(医師・臨床心理士など)の手助けによる治療を必要とする患者が示す症候を「ペット・ロス症候群」としている。一方で、朝比奈(2002)は、その体験の多様さにおいて、“症候群”として一括りにしてしまうのはふさわしくないという。コンパニオン・アニマルを喪失による悲嘆反応を深刻化する要因として、杉田(2001)は、①子どもとしてのコンパニオン・アニマルの存在、②日常生活におけるコンパニオン・アニマルの役割と人間関係の希薄化、③コンパニオン・アニマルを失って悲しいという自分の気持ちを周囲の人に言えないという社会環境の3点を挙げて説明している。また、‘少子化や高齢化、そして都市型の生活環境化が進むに従い、人と人とのつきあいがますます希薄になる…このような社会変化に対応すべく、日本でも「ペットロス」への正しい理解が必要とさ

れることを認識しなければならないだろう (p.55)’ としめている。喪失による悲しみが親しい近くの人々によって慰められることが現代社会では少なくなっている。そのため動物と一緒に暮らしている人々にかかわっている専門家（獣医、ペットショップ、精神科医、臨床心理士等）の適切な対応が必要とされる場面が生じてきているのである。

青少年期の体験を探索的に研究した朝比奈（2002）は、コンパニオン・アニマルの喪失体験のある大学生女子 24 名を対象に半構造化面接法による面接調査を行い、その結果をカテゴリー分析した。15 のカテゴリーに分けているが、8 つにまとめて考察を加えている。つまり、以下のように 15 の小カテゴリーを 8 つの大カテゴリーに分類している。それぞれのカテゴリーは、1.家庭内におけるコンパニオン・アニマル（a 飼い始めるきっかけ b 飼育暦 c 世話における役割）、2.本人とコンパニオン・アニマル（a 家族にとってのコンパニオン・アニマルの役割・コンパニオン・アニマルのキャラクターの把握 b 生前のコンパニオン・アニマルの位置づけ）、3.コンパニオン・アニマルの喪失時（a コンパニオン・アニマルの死の原因 b コンパニオン・アニマルの最後を看取れたか）、4.喪失後の感情、5.悲しみへの対処と働きかけ（a 悲しみへの協力者本人の反応 b 協力者への働きかけの方向と内容）、6.死後のコンパニオン・アニマルの位置付け、7.喪失後の変化、8.これから先コンパニオン・アニマルを飼いたい・子どもにコンパニオン・アニマルを飼わせたいかその際コンパニオン・アニマルに何を期待するか、である。また、今後の展望と課題をまとめ、‘ペット・ロスに関する研究は残念ながら本研究がわが国における最初の質的研究にあたり、まだまだ未開拓の分野である (p.190)’ と述べ、今後の研究で‘わが国における人とペットとの関係が明らかになりより良いものになっていくことを心から所望する (p.190)’ としめている。また、安藤（2001）、佐久川・保住（1999）の研究は、高齢者とコンパニオン・アニマルの関係についてのものである。

Templer, Salter, Dickey, Baldwin & Veleber (1981) はペット尺度 (対ペット態度測定尺度) を作成し、Templer, Lavoie, Chalgujian & Thomas-Dobson (1990) は死に対する抑うつ感尺度 (うつの評定尺度) を作成した。その後、Planchon & Templer (1996) は、コンパニオン・アニマルの死による悲しみと個人的背景の相関関係を調べるために質問紙調査を行った。その質問紙は、対ペット尺度 (Templer et al., 1981)、うつの評定尺度 (Templer et al., 1990) および Fogle & Abrahamson (1991) が報告した症状をもとに作成したペット喪失調査 (悲嘆尺度) から構成されていた。そして、犬と猫の場合について調べ、その結果、犬の喪失による悲しみは、犬の死亡時にひとり暮らしであったか、女性であるか男性であるか、また、死に対する抑うつ感がどの程度であるかと関連したとしている。また、猫の場合は、死に対する抑うつ感、猫の死亡時の飼い主の年齢、女性か男性かに関連していたとしている。つまり、犬か猫かに関係なく、男性よりも女性の悲嘆得点が高いことが示された。また、そのどちらもコンパニオン・アニマルに対する態度と死後の悲しみの度合いが深く相関していた。

諸井 (1984) はペット尺度を翻訳して日本における信頼性と妥当性を検討した。佐々木・松田 (2003) はこれと悲嘆尺度をを翻訳して調査を行った。しかし、悲嘆尺度においては、日本人の心情にそわなかったり不足していたりする項目が見受けられ、必ずしも日本人の悲嘆を測りえているといえるかどうかは不明である。また、喪失後の飼い主の心理状態を捉えようとした浅田 (2000) は、自作の質問紙とサークルテスト (投影法のひとつ) と個人面接を行いコンパニオン・アニマルに対する愛着度によって分けられた2群について喪失後の心理状態とそのコンパニオン・アニマルの存在意義を考察している。しかし、日本では、子どもおよび青少年にとってのコンパニオン・アニマルの喪失がもたらす悲嘆の過程や、愛着と悲嘆の関連などに対する統計的手法を使った心理学的研究は、まだまだ少ないといえる。

近年日本では、マスコミなどで共に生活をしている動物の喪失が「ペット・ロス」として取り扱われ、その喪失のもたらす悲嘆の深刻さを警告する記事など、マスコミ露出の頻度が増えてきている。さらに、杉田(2001)が指摘しているように、動物やコンパニオン・アニマルに対する日本人の意識の変化や、日本人の意識に対する社会変化などがあり、そのような悲嘆に対する正しい理解が必要である。

一方、コンパニオン・アニマルを喪失した体験が飼い主にもたらす悲哀を、単にネガティブなものとのみ捉えるのではなく、‘悲哀の仕事をして人間の心をより成熟したものとし、より豊かでより愛情に満ち、より創造的な世界に導いてくれる道である>(Segal)’という捉え方がある(多田, 1992)。また的場(1999)が‘我々大人は、子どもに対して飼っている動物を通じて生命の価値に気づくよう援助し、死別によって引き起こる嘆き、悲しみは正常な反応であり、その悲しみや嘆きを他のものに転換する方法があることを教えなければならない(p.38)’と指摘している。このような捉え方は重要であるが、現時点においては、まだ十分でないコンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆に関する心理学的研究の基礎を固めることが重要であろう。

本研究では、コンパニオンアニマルの喪失体験が人間にもたらす悲嘆および悲哀について、青年期にあたる大学生・大学院生を対象に、調査法を用いて探索的に検討することを主な目的とする。まず、先行研究の対コンパニオン・アニマル態度測定尺度を充実させ、これまで十分でなかったコンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度を確立する。そして、人間のコンパニオン・アニマルに対する態度とその喪失体験における悲嘆に対する反応の特徴にどのような関係にあるのかを明らかにする。また、大きな悲嘆や「ペットロス症候群」に陥り易い特徴について心理臨床学的な視点から、考察し検討することも目的とする。

具体的には、以下の3つの内容について検討する。

①質問紙調査の結果を分析し、対コンパニオン・アニマル態度測定尺度の因子分析をおこない、次のことを検討する。a.コンパニオン・アニマルの飼育の有無または、飼育動物の種類によって、b.性別によって、コンパニオン・アニマルに対する態度の特徴の傾向が異なるかどうかをみて、コンパニオン・アニマルの飼育経験および性別が、コンパニオン・アニマルという存在に対してどのような態度を形成するかを捉える。

②コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度の因子分析をおこない、次のことを検討する。a.コンパニオン・アニマルの飼育の有無または、飼育動物の種類によって、b.性別によって、c.哺乳類飼育群においては死別体験の有無によって、悲嘆に対する反応の特徴が異なるといえるかどうか、また、それらに性差はあるか、をみて、性別、コンパニオン・アニマルの飼育経験および、コンパニオン・アニマルとの死別体験が、コンパニオン・アニマルの喪失に際してどのような悲嘆反応をもたらすかを捉える。

③本研究で作成するコンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度と、Planchon et al. (1996) のペット喪失調査の一部、および、佐々木ら (2003) の悲嘆尺度との比較・検討をする。そして、本研究の成果と限界について考察し、コンパニオン・アニマルとともに暮らす人間の、日常生活および臨床場面への応用へつなげられる可能性について考える。

第2章 方法

調査対象者：

国立の A 大学教員養成大学の学部学生および大学院生 148 名と、国立の B 大学工学部の学部学生および工学研究科の大学院生 89 名、総計 237 名（男性 125 名、女性 112 名）が質問紙調査に協力してくれた。

そのうち回答に不備のなかった男性 114 名（52.3%）、女性 104 名（47.7%）の合わせて 218 名が、本研究での分析の対象となった。分析対象者の内訳は、A 大学の学部学生 106 名と大学院生 32 名の合わせて 138 名（男性 35 名、女性 103 名）と、B 大学の学部学生 58 名と大学院生 22 名の合わせて 80 名（男性 79 名、女性 1 名）であった。

材料：

本研究では、各被験者のもつコンパニオン・アニマルに対する態度と、その人のコンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆への反応の特徴を測定するために、自己報告式の質問紙が使用された。

尺度の選択にあたって、コンパニオン・アニマルに対する態度の測定については、既存の浅川ら（2000）の対ペット態度測定尺度を改良した。そのとき、諸井（1984）も参考にした。また、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆への反応の特徴の測定については、西欧の項目数の十分でないものはあるものの、日本人にあった既存の適切な尺度が存在しないことから、新しく尺度を作成することとした。

なお、質問紙においては、「コンパニオン・アニマル」という言葉は日本で定着をしていないので、被験者に分かりづらいと考えられ、

それに変わる適当な言葉が見つからないことから、被験者の分かりやすさを優先して、「コンパニオン・アニマル」にかわって「ペット」を用いることとした。

質問紙は、①被験者の基本的属性（フェイス・シート）、②対コンパニオン・アニマル態度測定尺度、③コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度、から構成されていた。その内容は、以下に記すとおりであった。

①被験者の基本的属性（フェイス・シート）

全員に、性別、学年、飼育経験の有無が尋ねられた。そして、飼育経験があると回答した者にはさらに、飼育した経験のある動物の種類、その動物とのきずなの強弱、その動物の死別経験の有無が尋ねられた。

②対コンパニオン・アニマル態度測定尺度

この尺度は、被験者のコンパニオン・アニマルに対する態度を測定するものである。浅川ら（2000）の作成した対ペット態度測定尺度（質問項目 33）に Templer et al.（1981）が作成し、諸井（1984）が翻訳したペット尺度（質問項目 11）から、重複分および不適切と考えられた項目を省いた項目を追加し、44 項目の対コンパニオン・アニマル態度測定尺度が構成された。

③コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度

この尺度は、被験者のコンパニオン・アニマルの喪失に対する悲嘆への反応の特徴を測定するものである。尺度の構成にあたっては、まず以下の 1) 予備調査、2) 悲嘆尺度 (Planchon et al, 1996)、3) 自作、から得られた計 110 個の記述を得た。それらを KJ 法によって類似の項目等を整理し、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆への反応の特徴を測定するのに使用可能と考えられた 66 項目が選択された。さらに、5 人の第 3 者によるワーディング

を行い教示文および質問文の検討を行い、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度が構成された。

- 1) 予備調査による項目：大学院生 8 名を対象に予備調査を実施した。この予備調査では、「私は、一緒に暮らしている動物を失った時、・・・」と「私は、一緒に暮らしている動物を失った後、・・・」で始まる文に続く文章を文章完成法的に、それぞれ 5 個以上作成することが回答者に求められた。それらの記述から得られた項目が作成された。
- 2) 悲嘆尺度 (Planchon et al, 1996) の項目：Fogle et al. (1991) を元に Planchon et al. (1996) が作成した悲嘆尺度 (質問項目数 11) を筆者が翻訳しなおした項目である。そのうち、記述が日本人の心情に明らかにそわないなど、筆者が不適切であると判断した項目は除かれている。
- 3) 自作の項目：先行研究を参考にして筆者により作成された項目である。2)には含まれてはいないが悲嘆尺度に入りうる可能性のあると思われるものについて作成された。

なお、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度の質問紙では、被験者は飼っていた子犬の喪失場面についての教示文を提示され、教示場面を想像し登場人物がどのように思い、感じ、行動し、どのような変化があったかについて、回答することを求められた。教示文は、飼育期間および飼育を始めた理由によって、以下の 4 通り (*) に分かれており、無作為で被験者を 4 グループに分けた。

- (*) 飼育期間 (短期間、長期間；2 パターン) × 飼育を始めた理由 (熱心に頼みこんで、他人から頼まれて；2 パターン) であり、あわせて 4 通りである。

4 通りの教示文は、次の ABCD のとおりである。

A さんは、あなたと同じ年齢で同性の大学生です。A さんは犬が飼

いたくてたまらず、自分から熱心に頼み込んで子犬をゆずってもらい飼い始めました。世話をしてかわいがっていましたが、一ヶ月ほどして病気で死んでしまいました。 Aさんはこのとき、どのように思い、感じ、行動したでしょうか。また、Aさんには、どのような変化があったでしょうか。それぞれの文章を読んでもっともあてはまると思うところを1つ選んで○をつけてください。

Bさんは、あなたと同じ年齢で同性の大学生です。Bさんは頼まれて子犬を飼うことになりました。世話をしているうちに、だんだんかわいくなってきました。ところが、一ヶ月ほどして病気で死んでしまいました。（以下、Aと同様のため省略）

Cさんは、あなたと同じ年齢で同性の大学生です。Cさんは小さい頃犬が飼いたくてたまらず、熱心に頼み込んで子犬をゆずってもらい飼い始めました。世話をしてかわいがり、長い間一緒に暮らしてきましたが、とうとう病気になって死んでしまいました。（以下、Aと同様のため省略）

Dさんは、あなたと同じ年齢で同性の大学生です。Dさんが小さい頃、頼まれて子犬を飼うことになりました。世話をしているうちに、だんだんかわいくなってきました。長い間一緒に暮らしてきましたが、とうとう病気になって死んでしまいました。（以下、Aと同様のため省略）

手続き：

- ・ 各調査対象者は集団場面において、質問紙票に回答するよう筆者から求められた。
- ・ 上記の他に、自発的に調査に協力する学生を募り、その学生には実験室にて質問紙票への回答が求められた。

第3章 結果

第1節 飼育動物種の検討

コンパニオン・アニマルの飼育経験の有無および、飼育者の飼育動物の種類についての回答を整理した。飼育の有無および飼育動物の種類は、「あなたが、ペットだと思うものをペットとしてご回答ください」と尋ねた質問の回答である。まず、表1のように、飼育経験の有無によって、飼育経験のある飼育者と、全く飼育経験のない非飼育者の割合を性別で比較した。その結果、男性群では114人中77名(67.5%)が、そして女性群では104人中78名(75.0%)がペットの飼育経験があると回答しており、女性群の方が飼育経験者の割合が多かった。男女を合計した場合、ペットの飼育経験があると回答したものは155名(71.1%)であった。

表1 飼育経験の有無

飼育経験			男性	女性	合計
あり	飼育者	人数	77	78	155
		%	67.5	75.0	71.1
なし	非飼育者	人数	37	26	63
		%	32.5	25.0	28.9
合計		人数	114	104	218
		%	52.3	47.7	100.0

次に、飼育動物の種類を整理した。下に示した表2からも明らかのように、飼育動物の種類は18種類であった。それらを表3のように7つの飼育動物類に分類した。その際、複数回答者の飼育動物については、その中で最も高等動物であるものを選択したので、動物の種類は18種類から12種類に減った。そして、飼育した経験のある動物によって飼育経験者をこの7つの飼育動物類に沿って整理した。

表2 飼育動物の全種類 表3 飼育動物の種類と分類

飼育種	人数
犬	80
猫	33
小鳥	38
にわとり	6
ハムスター	17
熱帯魚	8
金魚	28
魚	9
うさぎ	15
かめ	11
オカヤドカリ	1
カブトムシ	2
モルモット	1
へび	1
ねずみ	1
キジ	1
虫	3
イモリ	1
その他	1
不明	7
合計	264

飼育種			飼育動物類		
飼育種	人数	(%)	飼育動物類	人数	(%)
犬	80	51.6	犬	80	51.6
猫	10	6.5	猫	10	6.5
ハムスター	10	6.5	哺乳類	18	11.6
うさぎ	8	5.2	哺乳類		
小鳥	12	7.7	鳥類	15	9.7
にわとり	2	1.3	鳥類		
キジ	1	0.6	鳥類		
かめ	4	2.6	爬虫類	5	3.2
イモリ	1	0.6	爬虫類		
熱帯魚	5	3.2	魚類等	19	12.3
金魚	9	5.8	魚類等		
魚	5	3.2	魚類等		
その他	1	0.6	不明	8	5.2
不明	7	4.5	不明		
合計	155	100.0		155	100.0

※複数回答者については、その中の最も高等動物を、その人の飼育動物として分類した。

その後、表4のように全分析対象者を、哺乳類飼育群（犬、猫、哺乳類）、その他の動物飼育群（鳥類、爬虫類、魚類等）、非飼育群の3群に分類した。この3群を用いて、以下の検討および分析を行うこととした。この3群の比較をすると、哺乳類飼育群は、男性45名、女性63名、合計108名（49.5%）、その他の動物飼育群は、男性32名、女性15名、合計47名（21.6%）であり、非飼育群は、男性37名、女性26名、合計63名（28.9%）であった。

表4 飼育経験および飼育動物類による対象者の群

群	人数			比率 (%)
	男	女	合計	
哺乳類飼育	45	63	108	49.5
その他の動物飼育	32	15	47	21.6
非飼育	37	26	63	28.9
合計	114	104	218	100.0

第2節 対コンパニオン・アニマル態度測定尺度

大学生のコンパニオン・アニマルに対する態度を検討するために、各項目の反応に1~4点を付与し（肯定的反応が高得点、逆転項目については逆）、次に、コンパニオン・アニマルに対する態度尺度への反応得点に基づいて因子分析（主因子解 - ヴァリマックス回転）を実施した。GP分析の結果によって3項目が除外され、共通性の低い数値（.10未満）を示す項目、あるいは複数の因子に同程度の負荷量を示す項目等を除いて得られた最終的な分析結果から、表5に示すような、固有値1.0以上の解釈可能な4因子が抽出された。これらの因子に関して、第1因子は動物によってもたらされる精神的安定性の因子、第2因子は動物に対する親和性の因子、第3因子は動物に対する愛好性の因子と命名された。また、第4因子については、動物への嫌悪を示すものと解釈された。また、信頼性の検討のためCronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .93$ であった。

表5 対コンパニオン・アニマル態度測定尺度の因子分析結果

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
Q1.33 私にとってペットは、心の安定剤である。	0.736	0.160	0.221	0.122	0.614
Q1.10 私にとってペットは、心のよりどころである。	0.719	0.193	0.304	0.102	0.664
Q1.19 ペットは私にとってかけがえのない存在である。	0.674	0.254	0.372	0.166	0.730
Q1.32 私はペットを恋人のように思う。	0.646	0.081	0.125	0.165	0.483
Q1.6 ペットは私の宝物である。	0.601	0.291	0.447	0.194	0.749
Q1.18 私は、ペットはいつも一緒にいてくれると思う。	0.596	0.223	0.024	0.167	0.459
Q1.4 ペットは、話し相手になってくれる。	0.583	0.320	0.263	0.057	0.556
Q1.37 ペットは私の友達である。	0.554	0.371	0.369	0.208	0.653
Q1.41 動物は、愛でいっぱいだと思う。	0.534	0.317	0.142	0.060	0.493
Q1.26 ペットは、人の心を和ませてくれる。	0.133	0.668	0.362	-0.045	0.661
Q1.21 ペットは、人の心を癒してくれると思う。	0.207	0.662	0.338	0.045	0.635
Q1.28 ペットは、安らぎをあたえてくれる。	0.345	0.630	0.240	0.083	0.648
Q1.39 ペットは、人に好かれると思う。	0.110	0.603	0.057	0.078	0.394
Q1.42 私は、ペットは感情をもっていると思う。	0.076	0.529	0.169	0.003	0.348
Q1.16 ペットは、人になつくとする。	0.105	0.520	0.194	0.101	0.368
Q1.29 ペットは、人と共に生きる。	0.321	0.494	0.132	0.115	0.420
Q1.23 私は、ペットがエサを喜んで食べるのを見るのが好きである。	0.234	0.491	0.245	0.094	0.459
Q1.36 家庭の一員と同じように、尊敬の念をもって扱われるべきだと思う。	0.275	0.439	-0.025	0.162	0.371
Q1.3 私は、ペットが大好きである。	0.353	0.265	0.796	0.127	0.780
Q1.25 私は、動物が嫌いである。 (*)	0.077	0.226	0.625	0.105	0.512
Q1.1 ペットは、かわいいと思う。	0.272	0.290	0.617	0.107	0.615
Q1.34 動物を飼うのが好きだ。	0.366	0.209	0.613	0.140	0.625
Q1.2 ペットは、おもしろい。	0.221	0.383	0.574	-0.011	0.616
Q1.40 ペットは、きたない。 (*)	0.035	0.127	0.098	0.744	0.468
Q1.30 ペットは、うるさい。 (*)	0.256	0.028	0.106	0.622	0.488
Q1.9 ペットは、くさいと思う。 (*)	-0.026	0.126	0.028	0.613	0.365
Q1.27 ペットは、面倒くさいと思う。 (*)	0.237	0.042	0.314	0.527	0.432
Q1.44 ペットを家の中で飼うときは、家具などが傷んでしまうと思う。 (*)	0.264	-0.001	-0.038	0.457	0.335
	2 乗和(固有値)	4.600	3.912	3.403	2.134
	累積寄与率(%)	16.429	30.402	42.556	50.177

因子抽出法: 主因子法, 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法(7 回の反復で回転が収束), (*) : 逆転項目

次に、コンパニオン・アニマルの飼育経験の有無および飼育動物の種類で分類した3つの飼育群と、コンパニオン・アニマルに対する態度を検討するために、哺乳類飼育群・その他の動物飼育群・非飼育群別、および性別に対コンパニオン・アニマル態度得点の平均値とS.D.を下位尺度ごとに整理した。それは、表6に示すとおりであった。

表6 コンパニオン・アニマル飼育群別性別の
対コンパニオン・アニマル態度平均得点およびS.D.

群	性	人数		精神安定性	親和性	愛好性	嫌悪
哺乳類飼育	男	45	Mean	21.51	28.82	16.51	11.62
			S.D.	4.78	4.24	2.78	2.36
	女	63	Mean	24.41	29.71	17.22	12.41
			S.D.	5.26	3.08	2.43	2.56
その他の動物飼育	男	32	Mean	19.00	26.22	15.06	11.19
			S.D.	5.03	3.90	2.77	2.88
	女	15	Mean	23.13	28.47	15.80	11.93
			S.D.	5.60	3.11	2.78	2.55
非飼育	男	37	Mean	17.81	24.97	13.38	11.43
			S.D.	5.65	4.54	3.25	2.29
	女	26	Mean	20.77	27.19	14.04	11.50
			S.D.	4.45	2.35	2.75	2.12

表6に示した結果に基づいて、それぞれの下位尺度ごとに、3（飼育に関する群）×2（性別）の2要因分散分析をおこなったところ以下のことが明らかになった。

精神安定性については、飼育に関する群の主効果が有意であり（ $F=7.62$, $df=2/200$, $p<.005$ ）、TukeyのHSD法によって下位検定（ $p<.05$, 以下も同様）をおこなったところ、哺乳類飼育群の得点が非飼育群の得点を有意に上回ること、および、男性群に比べて女性群の該当得点が有意に高いこと（ $F=18.80$, $df=1/200$, $p<.005$ ）が明らかとなった。しかしながら、有意な交互作用は見いだされなかった。

親和性に関する同様の分散分析の結果からは、飼育に関する群の

主効果が有意であり ($F=11.33$, $df=2/200$, $p<.005$)、Tukey の HSD 法によって下位検定をおこなったところ、哺乳類飼育群の得点その他の動物飼育群および非飼育群の得点を有意に上回ること、および、男性群に比べて女性群の該当得点が有意に高いこと ($F=10.54$, $df=1/200$, $p<.005$) が明らかになった。しかしながら、有意な交互作用は見いだされなかった。

愛好性については、飼育に関する群の主効果が有意であり ($F=19.44$, $df=2/200$, $p<.005$)、Tukey の HSD 法によって下位検定をおこなったところ、哺乳類飼育群の得点その他の動物飼育群および非飼育群の得点を有意に上回り、また、その他の動物飼育群の得点が非飼育群の得点を有意に上回ることが明らかとなった。さらに、男性群に比べて女性群の該当得点が高い傾向にあることが示された ($F=2.88$, $df=1/200$, $p<.10$) が、交互作用は有意ではなかった。

コンパニオン・アニマルに対する嫌悪得点に関しては、いずれの主効果も交互作用も有意ではないことがわかった。

第3節 コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度

コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度についての質問紙では、被験者は飼っていた子犬の喪失場面についての教示文を提示され、教示場面を想像し登場人物がどのように思い、感じ、行動し、どのような変化があったかについて、回答することを求められた。その教示文は、飼育期間および飼育を始めた理由によって、次のように4通りである。それらは、飼育期間（短期間、長期間；2パターン）×飼育を始めた理由（熱心に頼みこんで、他人から頼まれて；2パターン）であり、それぞれA（短期間×熱心に頼みこんで）、B（短期間×他人から頼まれて）、C（長期間×熱心に頼みこんで）D（長期間×他人から頼まれて）であった。調査対象者に対し、教示文パターンは無作為にわりあてられた。そして、分析対象者に対する4種類の教示文パターンの分配数は、Aが55名、Bが54名、Cが53名、Dが56名であった。

大学生のコンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆について検討するために、各項目の反応に1~4点を付与し(肯定的反応が高得点、逆転項目については逆)、次に、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度への反応得点に基づいて因子分析（主因子解 - ヴァリマックス回転）を実施した。GP分析の結果によって、4項目が除外され、共通性の低い数値（.10未満）を示す項目、あるいは複数の因子に同程度の負荷量を示す項目等を除いて得られた最終的な分析結果から表7に示すような、固有値1.0以上の解釈可能な4因子が抽出された。これらの因子に関して、第1因子は喪失体験のもたらす思考・感情の因子、第2因子は喪失体験のもたらす身体反応・行動の因子、第3因子は喪失体験後の後悔と満足の因子、第4因子は悲嘆を直視することからの逃避・回避の因子と命名された。また、信頼性の検討のためCronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .92$ であった。

表7 コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度の因子分析結果

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
Q2.15 さびしかった。	0.762	-0.014	0.163	0.077	0.648
Q2.1 悲しかった。	0.735	-0.102	0.031	0.060	0.670
Q2.2 ぼっかり穴があいたように感じた。	0.727	0.032	-0.013	0.213	0.681
Q2.45 ふと愛犬を思い出す。	0.711	0.119	0.154	-0.121	0.668
Q2.3 自然と涙があふれてきた。	0.710	0.010	-0.078	-0.016	0.655
Q2.7 お墓をつくった。	0.706	-0.048	0.015	0.211	0.586
Q2.54 一緒に楽しく暮らしたことをたくさん思い出した。	0.688	0.135	-0.006	-0.142	0.654
Q2.59 家族を失ったような気持ちになった。	0.682	0.216	0.106	-0.031	0.607
Q2.27 その犬が今までいてくれて良かったと思った。	0.678	-0.081	-0.106	-0.161	0.643
Q2.30 何度も何度も愛犬が思い出される。	0.674	0.345	0.123	0.035	0.693
Q2.35 今でもいてくれたらいいと思う。	0.664	0.184	0.189	0.031	0.620
Q2.8 どこかで犬を見ると愛犬を思い出す。	0.661	0.146	0.121	-0.003	0.617
Q2.55 愛犬が好きだった食べものを見ると思い出す。	0.640	0.416	-0.022	-0.047	0.668
Q2.41 命は大切なものだと考えた。	0.611	-0.069	0.020	-0.030	0.502
Q2.50 ひどく気分が落ち込む。	0.590	0.380	0.225	0.061	0.636
Q2.19 ぼうぜんとした。	0.573	0.186	0.214	0.045	0.498
Q2.24 死んだ犬がこれまでいてくれたことに感謝した。	0.569	0.034	-0.278	-0.155	0.595
Q2.39 愛犬との思い出の物をしばらくそのままにした。	0.553	0.146	0.105	0.077	0.441
Q2.57 まだ生きているように感じた。	0.470	0.268	-0.002	0.172	0.403
Q2.4 何もしたくなくなった。	0.469	0.236	0.105	0.212	0.504
Q2.64 頭が痛くなった。	0.108	0.642	0.014	0.391	0.637
Q2.34 寝込んでしまう。	0.084	0.633	0.122	0.229	0.577
Q2.52 おなかの具合が悪くなった。	0.119	0.622	0.000	0.176	0.543
Q2.21 学校に行けなくなった。	0.057	0.598	0.191	0.055	0.522
Q2.23 眠れなくなった。	0.315	0.588	0.201	0.134	0.581
Q2.38 何も考えられなかった。	0.290	0.569	0.191	0.291	0.619
Q2.60 なかなか不安がおさまらなかった。	0.324	0.503	0.168	0.093	0.473
Q2.40 食欲がなくなった。	0.283	0.466	0.191	0.314	0.561
Q2.53 カウンセラーに相談した。	-0.024	0.454	-0.108	0.252	0.566
Q2.22 ひとりきりになりたい。	0.032	0.413	0.269	0.027	0.450
Q2.62 医師の治療が必要になった。	-0.099	0.409	-0.128	0.285	0.593
Q2.46 死んだのは私のせいだと思った。	0.121	0.193	0.693	0.188	0.607
Q2.32 世話を失敗したと感じた。	0.002	0.017	0.690	0.202	0.630
Q2.10 もっとちゃんと世話をすればよかったと思う。	0.074	-0.089	0.605	0.164	0.540
Q2.5 十分世話をしてきたので満足だったと思う。(*)	0.066	0.145	0.585	-0.089	0.500
Q2.17 なくしてしまったことを後悔した。	0.256	0.126	0.574	0.096	0.509
Q2.20 最期を看取れたので満足だった。(*)	-0.184	0.079	0.492	-0.050	0.474
Q2.61 くやしかった。	0.289	0.180	0.464	0.152	0.531
Q2.65 犬が死んだことを考えないようにした。	0.026	0.176	0.225	0.638	0.606
Q2.66 他のことに没頭した。	0.004	0.143	0.055	0.576	0.492
Q2.6 周りの人にやつあたりをした。	-0.068	0.132	-0.076	0.566	0.439
Q2.25 愛犬を思い出すものを避ける。	-0.026	0.163	0.122	0.551	0.460
Q2.16 やけ食いをした。	0.074	0.209	-0.029	0.431	0.421
Q2.47 もう動物は飼いたくないと思った。	0.083	0.093	0.263	0.425	0.452
Q2.37 ペットを飼うことに興味を失った。	-0.002	0.116	0.122	0.405	0.442
2 乗和(固有値)	9.058	4.302	3.244	2.911	
累積寄与率(%)	20.129	29.689	36.898	43.367	

因子抽出法: 主因子法, 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法 (6 回の反復で回転が収束), (*) 逆転項目

次に、コンパニオン・アニマルの飼育経験の有無および飼育動物の種類で分類した飼育群と、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆に対する反応を検討するために、哺乳類飼育群・その他の動物飼育群・非飼育群別、および性別に悲嘆尺度得点の平均値と S.D. を下位尺度ごとに整理した。それは、表 8 に示すとおりであった。

表 8 コンパニオン・アニマル飼育群別性別の
コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆平均得点および S.D.

群	性	人数		思考・感情	身体・行動	後悔・満足	逃避・回避
哺乳類飼育	男	45	Mean	62.16	22.42	18.53	14.40
			S.D.	8.22	4.83	3.40	3.58
	女	63	Mean	67.95	22.46	18.38	13.87
			S.D.	7.42	4.57	4.14	2.79
その他の動物飼育	男	32	Mean	59.09	20.97	17.72	13.63
			S.D.	11.41	5.20	3.63	3.31
	女	15	Mean	68.60	24.53	19.13	14.73
			S.D.	5.59	3.44	3.04	1.58
非飼育	男	37	Mean	58.16	21.00	18.30	14.19
			S.D.	8.42	4.59	4.03	2.53
	女	26	Mean	67.73	23.54	17.73	15.58
			S.D.	6.12	5.45	2.85	2.14

表 8 に示した結果に基づいて、それぞれの下位尺度ごとに、3 (飼育に関する群) × 2 (性別) の 2 要因分散分析をおこなったところ以下のことが明らかになった。

思考・感情については、有意な飼育に関する群の主効果と交互作用は認められなかったが、男性群に比べて女性群の該当得点が有意に高いこと ($F=45.34$, $df=1/200$, $p<.005$) が明らかとなった。

身体・行動に関する同様の分散分析の結果からは、有意な哺乳類飼育群/その他の動物飼育群/非飼育群の主効果と交互作用は認められなかったが、男性群に比べて女性群の該当得点が有意に高いことが示された ($F=8.23$, $df=1/200$, $p<.005$)。

後悔・満足については、いずれの主効果も交互作用も有意ではないことがわかった。

逃避・回避に関しても、いずれの主効果も交互作用も有意ではな

いことがわかった。

コンパニオン・アニマルの飼育経験があると回答した者（155名）に対しては、さらにそのコンパニオン・アニマルとのきずなの強弱と、コンパニオン・アニマルとの死別体験の有無が尋ねられた。

その中で哺乳類の飼育経験があると回答した者（108名）について、コンパニオン・アニマルとの死別体験の有無と、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆に対する反応を検討するために、コンパニオン・アニマルとの死別体験の有無別、および性別に悲嘆尺度得点の平均値と S.D.を下位尺度ごとに整理した。それは、表 9 に示すとおりであった。

表 9 哺乳類飼育群のコンパニオン・アニマルの飼育群別性別の喪失による悲嘆平均得点および S.D.

死別体験	性	人数		思考・感情	身体・行動	後悔・満足	逃避・回避
あり	男	38	Mean	61.32	22.37	18.45	14.26
			S.D.	8.28	4.87	3.66	3.56
	女	48	Mean	67.29	22.65	18.65	13.85
			S.D.	7.38	4.37	4.11	2.67
なし	男	7	Mean	66.71	22.71	19.00	15.14
			S.D.	6.68	4.96	1.41	3.89
	女	15	Mean	70.07	21.87	17.53	13.93
			S.D.	7.38	5.26	4.24	3.26

表 9 に示した結果に基づいて、それぞれの下位尺度ごとに、2（コンパニオン・アニマルとの死別体験の有無別）×2（性別）の 2 要因分散分析をおこなったところ以下のことが明らかになった。

思考・感情では、死別体験のない群に比べて死別体験のある群の該当得点が有意に高いこと（ $F=4.42$, $df=1/100$, $p<.05$ ）と、男性群に比べて女性群の該当得点が有意に高いこと（ $F=5.75$, $df=1/100$, $p<.025$ ）が明らかとなったが、有意な交互作用は見いだされなかった。

その他、身体・行動、後悔・満足、逃避・回避では、いずれにおいても、いずれの主効果も交互作用も有意ではないことがわかった。

第4章 考察

第1節 結果の考察

コンパニオン・アニマルに対する態度尺度：

本研究では、コンパニオン・アニマルに対する態度として、精神安定性、親和性、愛好性、嫌悪の4因子が抽出された。日本における同様な尺度は、本尺度を作成するにあたり用いた、浅川ら(2000)の対ペット態度測定尺度と諸井(1984)のペット尺度が存在する。浅川ら(2000)では、親和性、精神安定性、嫌悪性、不憫さの4因子が、諸井(1984)では、愛好因子、交流因子、飼育因子の3因子が報告されている。本研究によって抽出された4因子と浅川ら(2000)の4因子を比較すると、本尺度作成過程で浅川ら(2000)の不憫さを表す因子が抜け落ち、その他の3因子が本尺度の4因子に分配された結果となっていた。不憫さの因子は、「自由がない」「かわいそう」の2項目のみからなっており、もともと弱かったものがなくなったと考えられ、妥当である。また、諸井(1984)と比較すると、本尺度作成過程で諸井(1984)の交流因子と飼育因子は抜け落ち、愛好因子が本尺度の4因子に分配された結果となっていた。交流因子は、例えば「私は、毎日ペットと遊んでいたい」などであり、コンパニオン・アニマルとのコミュニケーションを積極的に行うことを示す因子である。また、飼育因子は、「ペットを飼うことは、お金の無駄使いである」などで、家庭でのコンパニオン・アニマル飼育の肯定を示す因子である。これは、コンパニオン・アニマルとの積極的なコミュニケーションおよびコンパニオン・アニマル飼育の肯定という価値観は、本尺度ではさらに内容が分解されていると考えられる。またこれらは、コンパニオン・アニマルが日常の生活

世界の中にも広く受け入れられつつある社会状況を反映している可能性も考えられる。

コンパニオン・アニマルの飼育とコンパニオン・アニマルに対する態度：

「今までにペットを飼った経験がありますか」という質問に、「ある」と回答した学生は、分析対象となった者の 71.1%であった。そして、この飼育経験者の内訳をみると、哺乳類飼育群は 49.5%であった。この哺乳類飼育群に特徴的であったのは、コンパニオン・アニマルに対してより精神安定性を感じ、親和的で、愛好的であるということであった。浅川ら（2000）で、調査時点で家庭においてコンパニオン・アニマルを飼育している飼育者がコンパニオン・アニマルに対してより親和的であったのと同様の結果を示していると考えられる。つまり、コンパニオン・アニマルを家庭で飼育することを考えると、動物嫌いの家族成員がいればそれは不可能であり、むしろ、コンパニオン・アニマル飼育家庭の構成員は少なくとも、動物に対しては受容的で肯定的な態度をあらかじめ形成していると考えるのが妥当である。

一方、コンパニオン・アニマルに対する嫌悪の程度は、飼育経験の有無や飼育経験のある動物の種類が違っていても、ほとんど差がみられなかった。浅川ら（2000）において、調査時点で家庭においてコンパニオン・アニマルを飼育している飼育者の嫌悪の程度は低いことが示されている。本研究ではこの結果が異なったことから、過去に飼育経験があるかどうかということとコンパニオン・アニマルに対する嫌悪の程度は関連がないが、現在飼育しているかどうかということとは関連があるということがいえると考えられる。

また、上記の飼育経験者 71.1%のうち、その他の動物飼育群は 21.6%であった。以下に、その他の動物飼育群を中心としてそれぞれの因子ごとに特徴をみていく。まず、精神安定性については、哺乳類飼育群と非飼育群の間に有意な差があった。また、哺乳類飼育群とその他の動物飼育群およびその他の動物飼育群と非飼育群の間

には有意な差はなかったが、対コンパニオン・アニマル態度得点の重み付けのない平均値は、哺乳類飼育群－その他の動物飼育群－非飼育群の順に並んでいた。したがって、精神安定性ではその他の動物飼育群は、他の2群の中間の態度を形成しているといえる。親和性については、哺乳類飼育群とその他の動物飼育群および非飼育群に有意な差がありその他の動物飼育群と非飼育群には有意な差はみられなかった。このことから、親和性では哺乳類飼育群と他の2群とで明らかに違いがあるといえる。これは、哺乳類を飼育する場合、その他の動物に比べコンパニオン・アニマルの世話をよくしているためではないだろうか。さらに、対コンパニオン・アニマル態度得点の重み付けのない平均値は、哺乳類飼育群－その他の動物飼育群－非飼育群の順に並んでいた。したがって、親和性ではその他の動物飼育群は、他の2群の中間の態度を形成していることもいえる。愛好性については、対コンパニオン・アニマル態度得点の重み付けのない平均値が、哺乳類飼育群はその他の動物飼育群より有意に高く、その他の動物飼育群は非飼育群より有意に高かったことから、愛好性は飼育経験の有無および飼育種に大きく左右されるといえる。以上のことから、飼育経験者であっても、哺乳類を飼育したことがない場合は、哺乳類を飼育したことがある場合と比べ、コンパニオン・アニマルに対する態度の程度が弱まり、非飼育者に近づくということがいえるのではないだろうか。逆に、嫌悪の程度については、3群全ての間には有意な差がみられなかったことから、嫌悪の程度は飼育経験および飼育種に左右されないといえる。以上のように、コンパニオン・アニマルに対する態度は、因子ごとに、飼育の有無および飼育種によって異なる影響を受けることがいえた。

精神安定性および嫌悪の程度で有意な差がみられなかったのは、他の因子に比して、飼育経験や飼育種よりその人個人の他の要因によるところが大きいのではないだろうか。

コンパニオン・アニマルに対する態度と性差には、精神安定性、親和性、愛好性の3点で差が生じていた。いずれも女子学生群が男

子学生群の得点を上回っていた。この結果は、浅川ら（2000）の結果と同じであり、女子学生の方がコンパニオン・アニマルをより肯定的に認知していることと、コンパニオン・アニマルをより精神的な依存対象とみなす傾向にあることを示唆している。

コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度：

これまでコンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆を測定するのは、Planchon et al.（1996）が用いたペット喪失調査の一部に存在した。これは、イギリスの獣医師の協力を得て調査した Fogle et al.（1991）が報告している 11 項目に基づいて作成されたものである。Planchon et al.（1996）は、ボックスチェック式の 2 件法で尋ねており、その調査結果では、11 項目のうち 2 項目に回答した者はなかったとしている。日本ではこの 11 項目を、佐々木ら（2003）が翻訳して悲嘆尺度として用いた研究がある。しかし、6 段階評定で質問しているにもかかわらず、因子分析をおこなうなどの内容による検討はなされておらず、合計得点のみでしか分析していない。また、Planchon et al.（1996）を直訳しており、日本人の心情にそわなかったり不足したりしている。質問項目として不足しているものは、横山（1996）が報告している 5 段階のうちの第 1 段階（混乱、否認）と第 5 段階（あきらめ、現実の受容）、鷺巣（1998）が報告している身体的悲嘆反応としての症状（消化器症状、頭痛、食欲以上など）、朝比奈（2002）が報告している喪失後の感情（後悔、否認、喪失感、安堵など）、浅田（2000）の質問紙にあるお墓をつくる、遺品が捨てられない、などの行動などに関するものである。これら不足している点については、本研究で文章完成法式におこなった予備調査で、ほとんど挙げられた。そのため全 66 項目を悲嘆尺度として調査をおこなった。その結果、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度として、喪失体験のもたらす思考・感情の因子、喪失体験のもたらす身体反応・行動の因子、喪失体験後の後悔と満足の因子、悲嘆を直視することからの逃避・回避の因子の 4 因子が抽出された。こ

これらの因子は主に臨床的な先行研究で個別に指摘されていた、喪失において考え得る悲嘆反応をほぼ網羅しており、日本における、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆を詳しく測定するものとして初の尺度である。

コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆：

本研究では、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆によって示されるであろう反応のうち思考・感情反応と身体・行動反応では、有意な性差が生じていた。いずれも女子学生群が男子学生群の得点を上回っていた。この結果は、喪失を体験したときには、男子学生より女子学生の方が、より悲嘆の思考や感情をもったり、より悲嘆がひきおこす身体反応や行動が生じたりする傾向があることを示唆していると考えられる。一方、喪失体験後の後悔・満足反応および悲嘆を直視することからの逃避・回避反応については、有意な性差はみられなかった。つまり、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆による反応であっても、女子学生が強く反応する思考・感情反応と身体・行動反応の2つと、性差があるとはいえない後悔・満足反応と逃避・回避反応とが存在した。このことから、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆反応において、女性の方がより強い感情をオープンに表す可能性があるということと、その反応の中でも性差のないものも存在することが明らかとなった。満足・後悔の因子に差がなかったことは、主体性をもって事態に対処する態度などには性差がないことを示唆している可能性が考えられる。逆に、喪失による悲嘆に直面するという事態から逃避したい傾向も同様に性差がないと考えられる。つまり、コンパニオン・アニマルの喪失のもたらす悲嘆においては、感情的あるいは身体的反応には性差があるものの、喪失という現実を自分の問題として受け止め主体的に対処したり、あるいは逃避したりする行為には性差がないという可能性が考えられる。

ここで悲嘆反応について本研究結果と先行研究の結果とを比較・検討する。

Planchon et al. (1996) は、コンパニオン・アニマルの死による悲しみと個人的背景の相関関係を調べるために、調査者が所属するルーテル教会のメンバーを対象に質問紙調査を行った。その内訳は、男性 23 名、女性 56 名、不明 1 名の合計 80 名であり、年齢層は、28～88 歳で平均年齢 49.67 歳であった。調査では犬と猫の場合について調べ、その結果、犬か猫かに関係なく男性よりも女性の悲嘆得点が高いことが示された。本研究では調査対象は学生であったが、彼らの結果は、本研究の悲嘆反応（思考・感情、身体・行動）の結果と一致しており、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆反応（思考・感情、身体・行動）に性差があることは一般的であるといえる。

佐々木ら（2003）は Fogle et al. (1991) のペット喪失調査の一部を翻訳して悲嘆尺度として用いて質問紙調査を行った。それは、6 段階評定で尋ねられ各 1 点～6 点が割り当てられたが、因子に分解せず合計得点を悲嘆得点としている。それに基づく悲嘆の分析結果では、平均悲嘆得点はその他<小鳥<猫<犬の順に高くなっていること、男性と女性の間には有意な差がみられなかったこと、交互作用において犬・猫の悲嘆得点は、女性において小鳥・その他よりも高かったこと、小鳥・その他においては、女性より男性の方が悲嘆得点が高かったことを報告している。そして、コンパニオン・アニマルの種類に関係なく女性の方がコンパニオン・アニマルの喪失における悲嘆の程度が大きいというのではなく、飼い主の性別と死や離別の対象となった動物の種類によって異なることが示されたとしている。しかし本研究では、悲嘆反応の種類によって、性差があるものとないものがあることが明らかになっており、佐々木ら（2003）の悲嘆得点で性差に一貫性が見られなかったのは、悲嘆反応をとらえる尺度が不十分だったためではないかと考えられる。

今回の研究では、飼育動物の喪失による悲嘆によって、精神的な変化だけでなく、頭痛、不眠、食欲不振や腹具合が悪くなる等の身

体的変化をもが存在することが示された。これら変化は先行研究の例えば、鷺巢（1998）が観察した、身体的悲嘆反応としての症状（睡眠障害、消化器症状、頭痛、食欲異常など）と一致している。したがって一般的に普遍してよいと考えられる。

以上本研究結果における悲嘆反応は先行研究の個別の観察結果とおおむね合致しており、妥当であると同時に、全体像が把握できてきたと考えられる。

コンパニオン・アニマルの飼育とコンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆：

コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆によって示されるであろう反応は、コンパニオン・アニマルの飼育体験の有無や飼育体験者の飼育動物の種類によって、有意な差があるとはいえなかった。思考・感情反応と後悔・満足反応において、重み付けのない平均値で、わずかに哺乳類飼育群>その他の動物飼育群>非飼育群となっているのみであった。このことから、喪失のもたらす悲嘆反応には、各人のもつ飼育経験が影響をもたらすというよりは、各人のもつその他のパーソナリティが影響していると考えの方が妥当であろう。

コンパニオン・アニマルとの死別とコンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆：

コンパニオン・アニマルの飼育経験があると回答した者にコンパニオン・アニマルとの死別体験の有無を尋ねたところ、あると回答した者は飼育経験者のうちの 80.6 %であった。この飼育経験者の中でさらに哺乳類飼育群に分類された者の中で死別体験があると回答した者は、72.6 %であった。喪失による悲嘆反応は、哺乳類飼育経験者では、思考・感情において、死別の有無および性差によって有意な差がみられるものの、その他、身体・行動、後悔・満足、逃避・回避の3因子においては、男女とも死別体験の有無によって有意な差がないことが分かった。このことは、死別体験がなくても、死別を想像してどのような状況になるのか十分理解し、予測することができるため有意な差がみられなかったといえるのではないだろうか。

思考・感情でのみ有意な差がみられたことについては、その悲嘆が予測できるとはいっても、実際に経験することがある方が悲嘆による思考・感情反応をより強いものと考えているといえるのではないだろうか。

喪失による悲嘆に対する死別体験の有無は、本研究では思考・感情反応に有意な差をもたらしたが、身体・行動反応、その他2因子についてはそうではなかった。しかし、本研究における研究協力者は学生という均質の集団であり、年齢、職業、生活状況の異なる集団に対応してまで、結論を及ぼすことはできないと考えられる。例えば Planchon et al. (1996) は、喪失による悲しみの度合は、犬や猫の死亡時にひとり暮らしであったかとか、飼い主の年齢に関連していたとしており、コンパニオン・アニマルとの死別の経験の有無による悲嘆反応については、調査対象をより広い層に拡大すると身体・行動、その他2因子に関しても有意な差が出る可能性はあるのではないだろうか。

第2節 まとめ

本研究では、まず対コンパニオン・アニマル態度尺度を充実させる試みをおこなった。その結果、先行研究の浅川ら(2000)と諸井(1984)で報告されていた因子から、それぞれいくつかの因子が抜け落ちた。これについては、因子の内容が分解されて充実したと考えた。また、急速にコンパニオン・アニマルが社会的に認知されていることを物語っている可能性を考えた。次いで、本研究では、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆を統計的に測定する初の尺度を作成した。そして、感情・思考、身体・行動、後悔・満足、逃避・回避の4因子を抽出した。これらは喪失にあたっての精神的悲嘆反応および身体的悲嘆反応の両者を捉えた初めてのものであり、さらに充実させることによって、今後の臨床心理学的調査に十分寄

与できるものと考えられる。さらに、本研究によっても喪失による精神的、身体的な影響の存在も明らかになったので、臨床場面で注意深い対応が必要であることが示されたと考える。

しかしながら、本研究では、コンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆を測定するのに、その持続期間ではなく、どのような症状が現れるかに重点をおき、また、仮想場面を設定した質問紙を用いたため、限界があった。今後の調査では、悲嘆のプロセスの長さを評価し、自分のコンパニオン・アニマルを喪失した当事者に協力してもらいその心理過程をより詳しく探ることも必要であろう。

また、現時点でコンパニオン・アニマルに対する態度とその喪失による悲嘆との間の関係、両尺度とコンパニオン・アニマルとのきずなどの関係、両尺度と飼育期間や飼育のきっかけとの関係などを見ることができていない。今後、これらのことについて、さらに充実させ公に発表したい。

引用文献

- 安藤孝敏 2001 高齢者とペット動物 老年社会科学, **23**(1), 25-30.
- 浅田真子 2000 ペット・ロス体験後の飼い主の心理状態—ペットに対する愛着の強さから— 武庫川女子大学発達臨床心理学研究紀要, **2**, 121-131.
- 朝比奈千絵 2002 青少年期における飼育動物の喪失(ペットロス)体験に関する探索的研究 教育臨床心理学研究, **5**, 181-194.
- 浅川潔司・佐野智子・古川雅文・東由佳・森田恵子 2000 ペット動物の癒しの効果に関する健康心理学的研究 兵庫教育大学研究紀要, **20** (第1分冊), 115-119.
- Boldt, M. A. & Dellmann-Jenkins, M. 1992 The impact of companion animals in later life and considerations for practice. *Journal of Applied Gerontology*, **11**(2), 228-239.
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and Loss, Vol.3 Loss : Sadness and Depression* Hogarth Press. (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳 1980 母子関係の理論Ⅲ 対象喪失 岩崎学術出版社)
- Bryant, B. 1990 The richness of the child-pet relationship : A consideration of both benefits and costs of pets to children. *Anthrozoös*, **3**, 253-261.
- Bustad, L. K. 1994 日本語版への序 Katcher, A. H. & Beck, A. M. [ed.] 1983 *New Perspectives on Our Lives with Companion Animals* University of Pennsylvania Press (コンパニオン・アニマル研究会(訳) コンパニオン・アニマル—人と動物のきずなを求めて— 誠信書房)
- Deeken, A. 1986 悲嘆のプロセス—残された家族へのケア— デーケン, A. (編) 死への準備教育 第2巻 死を看取る メヂカルフレンド社, Pp.255-274.
- Fogle, B. & Abrahamson, D. 1991 Pet loss : A survey of the attitudes and feelings of practicing veterinarians, *Anthrozoös*, **3**, 143-150.
- Freud, S. 1917 Mourning and Melancholia. *S. E.*, **14**. (井村恒郎・小此木啓

- 吾訳 1970 悲哀とメランコリー フロイト著作集6 (人文書院)
- 藤崎亜由子 2002 人はペット動物の「心」をどう理解するか: イヌ・ネコへの言葉かけの分析から 発達心理学研究, **13**(2), 109-121.
- Katcher, A. H., Freidmann, E., Beck, A. M. & Lynch, J. 1983 動物を眺め、動物に話しかけることと血圧との関係—生き物との相互作用の生理的結果— Katcher, A. H. & Beck, A. M. [ed.] *New Perspectives on Our Lives with Companion Animals* University of Pennsylvania Press (コンパニオン・アニマル研究会(訳) 1994 コンパニオン・アニマル—人と動物のきずなを求めて 誠信書房)
- 加藤元 1999 ペットで癒そうこころの病気 成美堂出版
- 小暮規夫 1986 都市生活と犬と猫のかかわり ペットからコンパニオン・アニマルへ 獣医畜産新報, **782**, 544-547.
- Kübler-Ross, E. 1969 *On Death and Dying*, Macmillan Company (鈴木晶訳 1998 死ぬ瞬間—死とその過程について— 完全新訳改訂版 読売新聞社)
- Levinson, B. 1983 人とコンパニオン・アニマルとの関係についての研究の将来 Katcher, A. H. & Beck, A. M. [ed.] *New Perspectives on Our Lives with Companion Animals* University of Pennsylvania Press (コンパニオン・アニマル研究会 (訳) コンパニオン・アニマル—人と動物のきずなを求めて— 誠信書房)
- 的場美芳子 1999 心の発達と動物(2)コンパニオン・アニマルの命から学ぶ—死への準備教育(特集動物が教えてくれる大切なこと—子どもと動物の関係学)
- 諸井克英 1984 孤独感とペットに対する態度 実験心理学研究, **24**, 93-103.
- Planchon, L. & Templer, D. 1996 The correlates of grief after death of pet *Anthrozoös*, **9**, 107-113.
- 斉藤具子・岡田昌史・加納克己 2000 在宅高齢者の17-KS-Sからみたストレス対応へのコンパニオンアニマル飼育の効果 医学と生物学, **141**(6), 297-302.
- 佐久川肇・保住芳美 1999 老人とペットとの関わりについて 川崎医療福祉

- 学会誌, 9(2), 145-147.
- 佐々木実・松田俊 2003 ペットの死後における飼い主の悲嘆に関する一研究
広島修大論集, 43(2), 135-144.
- 関谷透 1999 アニマル・セラピー 教育と医学, 47(11), 913-919.
- 杉田陽出 2001 なぜ人はペットの死を悲しむのか—ペットロスに見られる
人と動物の関係— 大阪商業大学論集, 120, 41-56.
- 多田かすみ 1992 対象喪失 心理臨床大辞典 培風館 p.921
- Templer, D., Lavoie, H., Chalgujian, H. & Thomas-Dobson, S. 1990 The
measurement of death depression Journal of Clinical Psychology, 46(6),
834-839.
- Templer, D., Salter, C. A., Dickey, S., Baldwin, R. & Veleber, D. M. 1981 The
construction of a pet attitude scale The Psychological record, 31,
343-438.
- 内田佳子 2001 動物の飼育と「ペット・ロス（喪失）症候群」 岩本隆茂・
福井至共編 アニマルセラピーの理論と実際 培風館, Pp.200-207.
- 宇田川廣美 2002 コンパニオンアニマルがもたらす健康と癒し 動物介在活
動と動物介在療法 Nursing today, 17(1), 75-77.
- 鷺巣月美 1998 ペットの死 その時あなたは 三省堂
- 横山章光 1996 アニマルセラピーとは何か 日本放送出版協会
- 横山章光 2002 アニマル・セラピーが子どものこころをひらく（上）ペット
の飼育ではぐくまれるもの 児童心理, 56(10), 106-111.

おわりに

本論では、コンパニオン・アニマルに関する研究の1分野として、その喪失による悲嘆についての研究結果を報告した。日本において、コンパニオン・アニマルをタイトルとした科学研究が存在しない中、この言葉を用いるべきか否かという点から最後までずっと手探りの状況であった。結論としては、その存在は認知されているが、言葉の定着はみられないということである。

本研究では、対コンパニオン・アニマル態度尺度およびコンパニオン・アニマルの喪失による悲嘆尺度の2つの尺度において、ある程度成果を報告できたと思う。人間と、ともに生活する動物との関係は、もとより重要な課題であるが、これからますます重要になっていくと考えている。本研究の結果が、さらなる研究につながっていくことを願っている。

謝辞

質問紙調査を実施するにあたり、快く調査に協力していただきましたA大学およびB大学の学部学生と大学院生のみなさまに感謝申し上げます。また調査の便宜をはかって下さいました、A大学の宇田川康夫先生、加藤雅恒先生、河野省三先生、庭野道夫先生、村山明宏先生、渡邊誠先生、B大学の鈴木啓嗣先生、田中亨胤先生に感謝申し上げます。

なかなか進まない論文作成に対して、忍耐と根気をもって最後まで指導して下さった浅川潔司先生に深く感謝いたします。

資料の収集・整理をする際に小塩富希代さん、福本理恵さんにご助力いただきました。ありがとうございました。最後になりましたが、浅川ゼミの皆さん、同級生の皆さんのご協力に感謝いたします。

Appendix

- 質問紙

ペット(動物)と人間のかかわりに関する調査

人間と動物のかかわりあいには、さまざまな相互作用があります。時代や社会の変化により、その関係は変化し続けています。近年、アニマル・セラピー、盲導犬、介助犬、ペットブームなどについて耳にする機会も多くなったのではないのでしょうか。この調査は、現在の日本における人間と動物の関係について、特に一緒に暮らすペット(動物)を失うことが飼い主に及ぼす影響について調べるために行われるものです。

この調査票は回収後、調査者の研究の資料となり、結果は統計学的に処理いたします。また、この目的以外に使用されることはなく、個人の秘密は厳守いたします。

なお、ご回答なさりたくない方は、この調査票をそのままお返し下さい。

回答いただいた調査票は一つたりとも無駄にせず、研究に活かしていきます。

ご協力よろしく願いいたします。

あなた自身のことについてお聞かせください。(あてはまるものに○をつけて下さい)

1. あなたの性別は [男 ・ 女]

2. あなたの学年は [学部1年 ・ 学部2年 ・ 学部3年 ・ 学部4年 ・

大学院生(25歳以下 ・ 26歳以上)歳 ・ その他()歳]

3. 今までにペットを飼った経験がありますか？

[ない ・ ある 《 犬 ・ 猫 ・ 小鳥 ・ その他() 》]

** 今までにペットを飼った経験がある方にお聞きします。

4. あなたとそのペットのきずなは、

[弱い/弱かった ・ やや強い/やや強かった ・ 強い/強かった ・ 非常に強い/非常に強かった]

5. ペットの死を経験したことがありますか？ [ない ・ ある]

(調査者)

兵庫教育大学大学院 教育臨床心理コース

渡邊 純子 (浅川ゼミ)

連絡先：〒673-1494 加東郡社町下久米 942-1

Tel.0795-44-2117 (浅川研究室)

以下に設問【1】～【3】があります。全てにご回答ください。

【1】 次の文をよくお読みください。あなた自身の考えや気持ちが、もっともよくあてはまるのは、次の4段階のうちどれですか。それぞれどれか1つに○をおつけください。

ち全 が然 う	ち が う	とそ おの り	りの全 とく おそ
---------------	-------------	---------------	-----------------

- | | | | | |
|--|--|--|--|--|
| 1 ペットは、かわいいと思う。 | | | | |
| 2 ペットは、おもしろい。 | | | | |
| 3 私は、ペットが大好きである。 | | | | |
| 4 ペットは、話し相手になってくれる。 | | | | |
| 5 ペットは私の寂しさを紛らわしてくれる。 | | | | |
| 6 ペットは私の宝物である。 | | | | |
| 7 ペットは、わがままだと思う。 | | | | |
| 8 動物はやさしいと思う。 | | | | |
| 9 ペットは、くさいと思う。 | | | | |
| 10 私にとってペットは、心のよりどころである。 | | | | |
| 11 ペットは生活を楽しくしてくれる。 | | | | |
| 12 ペットはおもしろいが、自分で飼おうとは思
ない。 | | | | |
| 13 私にとってペットは、家族の一員である。 | | | | |
| 14 ペットは、あたたかい。 | | | | |
| 15 動物は、家庭で飼うよりも、野生のままにして
おくか、動物園で飼うべきである。 | | | | |
| 16 ペットは、人になつくとと思う。 | | | | |
| 17 ペットは、気まぐれだと思う。 | | | | |
| 18 私は、ペットはいつも一緒にいてくれると思う。 | | | | |
| 19 ペットは私にとってかけがえのない存在である。 | | | | |
| 20 ペットは、かわいそうだと思う。 | | | | |
| 21 ペットは、人の心を癒してくれると思う。 | | | | |

ち全 ち とそ と全
が然 が おの おく
う う り り の

- 22 動物は笑うことがあると思う。
- 23 私は、ペットがエサを喜んで食べるのを見るの
が好きである。
- 24 私は、動物を可愛がることよりも、人間の方が
大切だと思う。
- 25 私は、動物が嫌いである。
- 26 ペットは、人の心を和ませてくれる。
- 27 ペットは、面倒くさいと思う。
- 28 ペットは、安らぎをあたえてくれる。
- 29 ペットは、人と共に生きる。
- 30 ペットは、うるさい。
- 31 ペットは人を裏切らないと思う。
- 32 私はペットを恋人のように思う。
- 33 私にとってペットは、心の安定剤である。
- 34 動物を飼うのが好きだ。
- 35 自分の手で直接エサを与えるのが好きだ。
- 36 家庭の一員と同じように、尊敬の念をもって扱
われるべきだと思う。
- 37 ペットは私の友達である。
- 38 ペットには、自由がないと思う。
- 39 ペットは、人に好かれると思う。
- 40 ペットは、きたない。
- 41 動物は、愛でいっぱいだと思う。
- 42 私は、ペットは感情をもっていると思う。
- 43 ペットを飼うのはお金のむだ遣いだと思う。
- 44 ペットを家の中で飼うときは、家具などが傷ん
でしまうと思う。

【2】以下の文章を読んで、次の質問にお答えください。

Aさんは、あなたと同じ年齢で同性の大学生です。Aさんは犬が喰いたくてたまらず、自分から熱心に頼み込んで子犬をゆずってもらい飼い始めました。世話をしてかわいがっていましたが、一ヶ月ほどして病気で死んでしまいました。Aさんはこのとき、どのように思い、感じ、行動したでしょうか。また、Aさんにはどのような変化があったでしょうか。それぞれの文章を読んでもっともあてはまると思うところを1つ選んで○をつけてください。

	全然 う ち が	ち が う	そ の と お り	全 く そ の と お り
1 悲しかった。				
2 ぽっかり穴があいたように感じた。				
3 自然と涙があふれてきた。				
4 何もしたくなくなった。				
5 十分世話をしてきたので満足だったと思う。				
6 周りの人にやつあたりをした。				
7 お墓をつくった。				
8 どこかで犬を見ると愛犬を思い出す。				
9 他の動物に夢中になった。				
10 もっとちゃんと世話をすればよかったと思う。				
11 死んだことはウソだと感じた。				
12 もう愛犬が死んでしまうのを体験するのはかなしく て嫌だ。				
13 新しく別の犬を飼おうと考えた。				
14 自分の子どもにペットを飼わせたいと思った。				
15 さびしかった。				
16 やけ食いをした。				
17 なくしてしまったことを後悔した。				
18 腹が立った。				
19 ぼうぜんとした。				
20 最期を看取れたので満足だった。				
21 学校に行けなくなった。				
22 ひとりきりになりたい。				

【2】以下の文章を読んで、次の質問にお答えください。

Bさんは、あなたと同じ年齢で同性の大学生です。Bさんは頼まれて子犬を飼うことになりました。世話をしているうちに、だんだんかわいくなってきました。ところが、一ヶ月ほどして病気で死んでしまいました。Bさんはこのとき、どのように思い、感じ、行動したでしょうか。また、Bさんには、どのような変化があったでしょうか。それぞれの文章を読んでもっともあてはまると思うところを1つ選んで○をつけてください。

	全然 う ちが	ち が う	そ の と お	全 く そ の と お
1 悲しかった。				
2 ぽっかり穴があいたように感じた。				
3 自然と涙があふれてきた。				
4 何もしたくなくなった。				
5 十分世話をしてきたので満足だったと思う。				
6 周りの人にやつあたりをした。				
7 お墓をつくった。				
8 どこかで犬を見ると愛犬を思い出す。				
9 他の動物に夢中になった。				
10 もっとちゃんと世話をすればよかったと思う。				
11 死んだことはウソだと感じた。				
12 もう愛犬が死んでしまうのを体験するのはかなしく て嫌だ。				
13 新しく別の犬を飼おうと考えた。				
14 自分の子どもにペットを飼わせたいと思った。				
15 さびしかった。				
16 やけ食いをした。				
17 なくしてしまったことを後悔した。				
18 腹が立った。				
19 ぼうぜんとした。				
20 最期を看取れたので満足だった。				
21 学校に行けなくなった。				

【2】以下の文章を読んで、次の質問にお答えください。

Cさんは、あなたと同じ年齢で同性の大学生です。Cさんは小さい頃犬が飼いたくてたまらず、熱心に頼み込んで子犬をゆずってもらい飼いはじめました。世話をしかわいかり、長い間一緒に暮らしてきましたが、とうとう病気になるって死んでしまいました。Cさんはこのとき、どのように思い、感じ、行動したでしょうか。また、Cさんには、どのような変化があったでしょうか。それぞれの文章を読んでもっともあてはまると思うところを1つ選んで○をつけてください。

	全然 ちが う	ちが う	その と お	全 く そ の と お り
1 悲しかった。				
2 ぽっかり穴があいたように感じた。				
3 自然と涙があふれてきた。				
4 何もしたくなくなった。				
5 十分世話をしてきたので満足だったと思う。				
6 周りの人にやつあたりをした。				
7 お墓をつくった。				
8 どこかで犬を見ると愛犬を思い出す。				
9 他の動物に夢中になった。				
10 もっとちゃんと世話をすればよかったと思う。				
11 死んだことはウソだと感じた。				
12 もう愛犬が死んでしまうのを体験するのはかなしくて嫌だ。				
13 新しく別の犬を飼おうと考えた。				
14 自分の子どもにペットを飼わせたいと思った。				
15 さびしかった。				
16 やけ食いをした。				
17 なくしてしまったことを後悔した。				
18 腹が立った。				
19 ぼうぜんとした。				
20 最期を看取れたので満足だった。				
21 学校に行けなくなった。				
22 ひとりきりになりたい。				

【2】以下の文章を読んで、次の質問にお答えください。

Dさんは、あなたと同じ年齢で同性の大学生です。Dさんが小さい頃、頼まれて子犬を飼うことになりました。世話をしているうちに、だんだんかわいくなってきました。長い間一緒に暮らしてきましたが、とうとう病気になって死んでしまいました。Dさんはこのとき、どのように思い、感じ、行動したでしょうか。また、Dさんには、どのような変化があったでしょうか。それぞれの文章を読んでもっともあてはまると思うところを1つ選んで○をつけてください。

	全然 う ちが	ち が う	そ の と お	全 く そ の と お
1 悲しかった。				
2 ぽっかり穴があいたように感じた。				
3 自然と涙があふれてきた。				
4 何もしたくなくなった。				
5 十分世話をしてきたので満足だったと思う。				
6 周りの人にやつあたりをした。				
7 お墓をつくった。				
8 どこかで犬を見ると愛犬を思い出す。				
9 他の動物に夢中になった。				
10 もっとちゃんと世話をすればよかったと思う。				
11 死んだことはウソだと感じた。				
12 もう愛犬が死んでしまうのを体験するのはかなしく 嫌だ。				
13 新しく別の犬を飼おうと考えた。				
14 自分の子どもにペットを飼わせたいと思った。				
15 さびしかった。				
16 やけ食いをした。				
17 なくしてしまったことを後悔した。				
18 腹が立った。				
19 ぼうぜんとした。				
20 最期を看取れたので満足だった。				
21 学校に行けなくなった。				
22 ひとりきりになりたい。				

ちがう 全然 ちがう とその ちがう 全くとその

- 23 眠れなくなった。
- 24 死んだ犬がこれまでいてくれたことに感謝した。
- 25 愛犬を思い出すものを避ける。
- 26 新しい動物と一緒に暮らしたくなった。
- 27 その犬が今までいてくれて良かったと思った。
- 28 仕方がないと思った。
- 29 なぜ、うちの犬が死ななければならないのか、と
思った。
- 30 何度も何度も愛犬が思い出される。
- 31 友達に失った犬の話をするのがつらい。
- 32 世話を失敗したと感じた。
- 33 愛犬がいなくなったことが信じられない。
- 34 寝込んでしまう。
- 35 今でもいてくれたらいいと思う。
- 36 話し相手がいなくなったように感じた。
- 37 ペットを飼うことに興味を失った。
- 38 何も考えられなかった。
- 39 愛犬との思い出の物をしばらくそのままにした。
- 40 食欲がなくなった。
- 41 命は大切なものだと考えた。
- 42 その犬を思い出すことによりなぐさめられる。
- 43 時間とともに忘れていく。
- 44 つい愛犬の名前を呼んでしまう。
- 45 ふと愛犬を思い出す。
- 46 死んだのは私のせいだと思った。
- 47 もう動物は飼いたくないと思った。
- 48 誰かと一緒にいたかった。
- 49 死んでしまったことが頭から離れない。

	ちがう 全然	ちがう	とおりの	とおりの 全くその
50 ひどく気分が落ち込む。				
51 いつまでも愛犬が使っていたものが捨てられない。				
52 おなかの具合が悪くなった。				
53 カウンセラーに相談した。				
54 一緒に楽しく暮らしたことをたくさん思い出した。				
55 愛犬が好きだった食べものを見ると思い出す。				
56 もっと早く気づいていれば……と思った。				
57 まだ生きているように感じた。				
58 動物を飼っている他の人のことをうらやましく思っ た。				
59 家族を失ったような気持ちになった。				
60 なかなか不安がおさまらなかった。				
61 くやしかった。				
62 医師の治療が必要になった。				
63 ほっとした。				
64 頭が痛くなった。				
65 犬が死んだことを考えないようにした。				
66 他のことに没頭した。				

● 「コンパニオン・アニマル (伴侶動物)」とは、人間と一緒に暮らすパートナーという意味です。
あなたはこの言葉を聞いてどう思いますか。感じるところを自由に記述してください。